

フィールドワークのひろやかな視界

かたよらず、こだわらず、とらわれず

谷 富夫

甲南大学文学部 教授

私は1970年代の学生である。そのころ社会学界では、質的調査と量的調査の優劣論争が続いていた。文字どおり「こっちが優れていて、あちは劣っている」の応酬で、著名な社会学者も加わったの論争だけに、私も無関心ではいらなかった。結局、集団研究のフィールドワークでは両方が必要であり、優劣論争にあまり意味はないという、今では常識的な考え方に、私も落ち着くわけだが、そうなるまでに多少の年月を要した。以下では、両方の必要性を最初に学んだ本と、比較的最近出会った、志を同じくする本とを挙げてみたい。3冊目は、私が「民族関係のフィールドワーク」などで使った参与観察法を初めて知った本である。

柔軟な方法選択

『都市の世界』

鈴木 広著

誠信書房 1970

本書は私の恩師、鈴木広先生が30代の論文集である。この中に「創価学会と都市の世界」という論文がある。この研究の目的は、創価学会が1950年代のわずか10年間で公称3千世帯から200万世帯に急膨張したメカニズムの解明である。結論は、離村向都と階層下降移動とを同時に経験した人びとの共同体の崩壊感覚と回復願望を、創価学会の信念体系と組織過程がすくい上げた、ということであった。社会学的には、戦後から高度経済成長にかかる時代の「移動効果」の発見が高く評価されている。

調査は福岡市で1962年に実施された。方法は、①創価学会各級幹部へのインタビュー、②「座談会」をはじめ各種の会合や組織行動への参加、そして③会員名簿より無作為に抽出した450人の訪問面接調査であった。調査法が目的合理的に複数選択されている。

たとえば、「離村向都と階層下降移動」を実証するためには、会員の出身地と、生家の職業と、現在の

職業上の地位とを、質問票を用いて量的に把握する必要がある。また、未信者の態度変容（入会）の鍵は「折伏」（布教を意味する教団用語）にあるが、その巧みな戦術を知るには、「座談会」の観察や、会員へのインタビューが必要である、等々。

創価学会研究だけではない。本書の第1章は東北大・新明正道グループによる「釜石調査」の理論的総括だが、この調査でもさまざまな方法が併用されていた。

私は1973年秋に九州大学文学部社会学専攻に進学し、学部、院生、助手の約10年間、鈴木ゼミで沢山の共同調査に——量的調査も質的調査も——参加させて頂いた。先生はいつも上述のやり方で、たとえば質問票を作るためには前もってその土地の歴史、集団、文化、行事、課題等を詳細に調べておく必要があるとか、質問票調査よりも生活史調査の方がふさわしければ、そちらを使うといった具合である。

例の優劣論争に対しても、先生は「どうしてこんな論争をするのか理解に苦しむ」と歯牙にもかけなかった。しかし私はまだ駆け出しだったので、両者の言い分に耳を傾けつつ、見よう見まねで調査の仕方をおぼえる日々であった。

仮説の索出と検証

『原爆体験』

濱谷正晴著

岩波書店 2005

調査法は、実際に自分で使ってみないことにはなかなか身につかないと思う。私が「質的調査による仮説の索出と量的調査による検証」のコンビネーションが一つの方法としてありうることに気づいたのは、九大を離れてしばらくたった昭和の終わり頃である。当時はまだ「混合研究法」という用語はなかった。私は博士課程に在籍中、沖縄のUターン経験者31人の生活史を一人で聞き取っていた。この膨大な（と主観的には感じられた）口述記録をど



うさばいたらよいものか、ずっと考えあぐねていたところ、上のアイデアが浮かんだとたんに分析の道が開けた。というか、生活史法をもっと大きな枠組の中に位置づける方法論を確立できて初めてヤル気が出てきた、と言うのが正直なところである。拙著『過剰都市化社会の移動世代』（淡水社、1989年）が、その一成果である。

それからずいぶん経って、大原社会問題研究所（法政大学）から『原爆体験』の書評依頼が来た。テーマは私の専門ではないが、一読して依頼の意図を了解した。本書で濱谷氏は、恩師石田忠氏が一人の被爆者の生活史から索出した「反原爆の思想の形成メカニズム」なる仮説を、被爆者6,744人の質問票データを用いて検証した。

「反原爆の思想の形成メカニズム」とは、①被爆による辛い体験が生きてくる意欲の喪失と正の相関関係にあり（漂流の必然性）、②この喪失経験が深い者ほど、「反原爆」——原爆に対する闘い——を生きて支えている（抵抗の可能性）、という2段階の仮説である。「漂流から抵抗へ」とまとめられる。

生活史調査から索出された仮説の信憑性を、大量調査によって高める「質と量」の相互補完関係が、師弟の絆で確保されていた。私にとっては「わが意を得たり」の一書である。

参与観察法の使い方

『ストリート・コーナー・ソサエティ』

W. F. ホワイト著、奥田道大・有里典三訳
有斐閣 2000

私が学部3年のときである。鈴木先生が都市社会学特講でホワイトの研究を引きつつ、参与観察法の講義をして下さった。そのとき話された、当時博士課程の院生だった山口弘光さん（その後松山大学教授、1992年没）のエピソードが今も忘れられない。「うちの研究室には、フーテンの研究のために自分もフーテンをやりながら修論を書いた院生がいます。彼がほかのフーテンたちと一緒に路上でシンナーを吸っていたら、新聞記者が他ならぬ彼の方へ取材に寄ってきたそうで、新聞記者に間違われるほど成りきっていたんですね」。

こんな話を聞いて心を動かさない社会学志望の学生がいるだろうか。さっそく読んでみた（私た



ちが読んだのは寺谷弘三訳。垣内出版、1974年刊）。ボストンのイタリア人移民街に住み込んだハーバード大の院生ホワイトは、地元の非行集団に加わって共に行動しながら、若者たちの生活世界とスラムの社会構造を描写する。傍目には「解体」（無秩序）としか見えないスラムを内側から見ることによって、そこに「構造」（秩序）を発見し、かつ、それが若者たちに生きる意味を与えている現実を開示した。都市の解体的側面を理論化したシカゴ学派都市論にアンチテーゼを提出したのが、本書の貢献であった。都市は解体的か構造的か？ ホワイトは、この問題意識に突き動かされて調査を進めていた。

「参与観察法はたんなるモノ珍しさでは使えない」。これが、そのときの読後感である。リアルな問題意識に支えられてはじめてこの方法は生きてくる。「まずは参与観察を必然たらしめる問題から発見することだ」と、ホワイトはこの入門者に教訓を与えていた。

それから十数年後、私は大阪・猪飼野に半年間住み込み、「生野オモニハッキョ」というボランティア団体で在日高齢女性に日本語を教えながら、民族関係の参与観察を試みる。やってみてわかったが、なるほど住込み調査でないか見えてこないものがある。

どの調査法にも一長一短があり、それぞれの長所を生かして相互補完関係を構築することが「フィールドワークの道」である。「沖縄生活史調査」と「猪飼野調査」は、このことを身をもって学んだ調査体験であった。